

ステロイド関連大腿骨頭壊死症の 予防と新しい治療

特発性大腿骨頭壊死症は、昭和 55（1980）年に旧厚生省により難治性特定疾患に指定され、医療費補助が開始された。加えて、全国規模の調査研究班（初代班長：故 西尾篤人 九州大学教授）が組織され、これまで数多くの素晴らしい研究成果が得られている。研究班発足以来、約 37 年が経過した今、医学・科学の目覚ましい進歩に伴い、これまでになかった数多くの新しい治療や予防法が報告されている。今回、学際的観点から各分野におけるトップレベルの先生方に最新の知見について概説して頂いた。

本症の基本的病態は、大腿骨頭の虚血性病変とされている。しかし、これまで数多くの基礎的・臨床的研究にもかかわらず、骨壊死発生そのものの原因、すなわち虚血の原因は未だ不明である。そして、単一の事象のみによるものではなく、いくつかの要因が重なりあって、最終的に虚血に陥る可能性も指摘されている。

本症の病態上、はっきりと判明していることとして、骨壊死が発生した時点では無症状だが（発生）、骨壊死巣が圧潰すると痛みを生じる（発症）ことである。その事実に基づき、発生の予防、あるいは発症（圧潰）予防に対する様々な観点からのアプローチが行われている。例えば、骨壊死発生そのものの予防を目的とした、SLE 患者を対象とした各種薬剤による臨床研究が開始されている。また一方で、発症前（Stage 1, 2）の骨壊死に対しては、圧潰予防や骨壊死巣の早期治癒促進を目的とした小侵襲の治療が開始されている。

本特集が、ステロイド関連大腿骨頭壊死症に対する予防と最新の治療法の現状を俯瞰する一助となれば幸いである。

（山本卓明）